JLTA Newsletter No. 56
日本言語テスト学会
The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 56　　発行代表者：渡部良典　　2024 年 (令和 6 年) 3 月 31 日発行
発行所：日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒036-8560 青森県弘前市文京町 1
弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター
横内裕一郎研究室 TEL: 0172-36-2111（代表） e-mail: u16yoko@gmail.com URL: http://jlta.ac

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第26回全国研究大会を終えて

加藤 万紀子（東北大学）

第 26 回全国研究大会が，9 月 9 日（土），10 日（日）に東北大学川内南キャンパスにて開催された。実行委員長という大役を務めさせていただくにあたり，ピッツバーグより 30 時間のフライトを乗り継ぎはるばる仙台までお越しくださった基調講演者の甲田慶子先生をはじめ，シンポジウムでご登壇いただいた松本佳穂子先生，山西博之先生，石井雄隆先生，ワークショップ講師の田村祐先生，JLTA 委員会の先生方，賛助会員の皆様，ご発表者の皆様，そして大会当日は東北地方に台風上陸という予報が出る中にも関わらず遠方よりお越しいただきました皆様に，この場をお借りして心からの感謝の気持ちをお伝えしたい。また，大会前日より３日間，「心を込めておもてなしをしよう！」という気持ちを胸に発足した東北大学 文学部３・４年生の９名と教育学部１名のボランティアチームの学生たちにも改めて感謝の気持ちを伝えたい。

３年ぶりの対面での全国研究大会を東北大学での開催をと打診を受けたのは，博士後期課程時代の指導教官である渡部良典先生から頂いた年始のメールでのことだった。対面での大会の参加経験がない私で務まるものなのか不安の大きさは相当なものであったが，例年の大会について詳細なご教示と温かい励ましのお言葉をいただき，引き受けさせて頂いた。しかし，対面開催を予定しているとはいえ，世の中の動きや会場校である東北大学が定めるコロナ対策の規定改訂の様子を伺いながらの準備開始となり，当然，感染者数の増大に伴い様々な規定が逆戻りした場合はオンライン開催になることも頭の片隅におきながら準備を進めてきた。まずは，大会テーマを決めるにあたり近年ますます関心がよせられている「技能統合スキルの育成と評価（Integrated-skills Learning and Assessment）」をテーマとして決定したのち，今回のご登壇者の先生方への打診をさせて頂いた。その際には，齋藤英敏先生，澤木泰代先生，そして松本佳穂子先生には尽力いただき大いに助けて頂いた。特に，シンポジスト兼コーディネータを引き受けてくださった松本先生には，大会が近づくにつれ不安がどんどん大きくなっていることにも気づいていない私を大会が終わるまでの間，様々な面でのサポートをして下さった。

今回の大会では，このような大役が不慣れではあるが待ちに待った対面開催ということもあり，コロナ禍とともに大学生になった学生たちにとっては，学生としてこのような大会のお手伝いをするのが最初で最後ということもあり，学生たちと一緒に何かを作り上げるという思い出を作りたいという一つの願いもあった。また，東北大学文学部では英語教育に関連する授業が少なく，今回ボランティアとして参加してくれた教員志望の学生たちにとっても，とても貴重な経験になるだろうという思いもあった。実際に，教員採用二次試験の勉強時間の合間をぬってお手伝いをしてくれた。当日は，運営委員の先生方とも Group Chat を利用して，情報交換をさせていただいてきたが，学生たちとも同様に Group Chatを設け，気づいたことを遠慮なくやりとりできる雰囲気作りを大切にしてきた。普段は授業を通してしか時間を過ごすことができなかった学生たちが伸び伸びと仕事をしている姿が非常に頼もしくそれを見られたことも大変嬉しかった。休憩時間に，学生たちが基調講演者の甲田先生と談笑しながら進路のこと留学のことなどを相談している姿も度々見かけた。私自身，長年いつかお会いしてみたいと願っていた研究者である甲田先生のご著書である Reading to Learn in A Foreign Language : An Integrated Approach to Foreign Language Instruction and Assessment の内容となるご講演を聞かせて頂けたこと，そして，甲田先生の温かいお人柄に触れることができたことも，私にとっては夢のような時間だった。また，大会初日の懇親会で，副会長の中村先生が学生ボランティアにスポットライトを当てて下さったことにも大変感謝をしている。学生たちにとっても大学生活最後の夏の思い出に残る瞬間だったことだろう。

本大会は，コロナ禍の状況により対面になるかオンラインになるかという見通しが不透明な中，主にオンライン開催での運営委員の経験しかないという先生方と手探りで準備をするという過程を経てきた。コロナは落ち着き対面開催は間違いないという確信を得てから本格的に大会直前までの間，横内裕一郎先生をはじめ，久保田恵佑先生と前田啓貴先生には連日 Group Chat でのやりとりを通し助けて頂いた。プログラム作成の際には田中洋也先生が大変親身にご相談に乗って下さった。久保田先生と前田先生は，本来私がやることになっていた仕事も「よかったらやりますよ！」と気持ちよくお声をかけて下さり大変頼りになる場面が何度もあった。大会前日にはやっと運営委員の先生方と学生アルバイトたちで対面集合ができるという段階まできたのに，次はコロナではなく台風であった。台風 13 号が東北地方を直撃という予報が出ており大学からの災害対策アラートも発令する中，最後の最後まで私の心は不安が募る一方で，本当に大会は開催できるのだろうかと不安でいっぱいだった。しかし，風が強まり雲行きも怪しい中，準備のために遠方から集まってくださった熊澤孝昭先生や藤田亮子先生，運営委員の先生方，大会当日用の買い足し品を買うために長靴を履き雨合羽を着て自転車を漕いで 100 円均一を何件もまわり買い出しに出てくれた学生の女の子たち，雨で足元が悪いといけないからとルートを考え，会場案内の大きな立て看板を背負い１つ１つにビニール袋をかけてくれた学生の男の子たち，皆で開催を信じ準備を進めていた。もし交通機関がストップし開催できなくなったらという不安と連日の睡眠不足からもう気力が限界だった私に「先生，大丈夫ですよ。こんなに私たち頑張って準備しているんだから，絶対に台風はそれますよ！」と学生にたくさん励ましてもらった。齋藤

先生も，ニコニコされながら「大丈夫，大丈夫」と言ってくださった。

翌日は，私たちの願いが届き，晴天だった。川内駅のある川内北キャンパスの方面からや国際センター駅のある萩ホールの方面から続々と人が集まってきた。顔馴染みの友人や先輩後輩，大会参加・運営のために遠方からお越しくださった渡部倫子先生や周育佳先生をはじめとする多くの先生方が「晴れてよかったですねー！」と笑顔で駆け寄ってきて下さった時には，言葉では言い表せないほどの嬉しさで胸がいっぱいだった。3 年ぶりの対面での開催ができることを信じ手探りでも先生方や学生たちと心をひとつにして準備を進めてきたからこそ実現できたのだと思う。今回の大会では人の温かさを沢山感じることができ，これもやはり対面開催の良いところなのだと実感した。

Reports on
The 26th Annual Conference of JLTA
Sep. 9 (Sat) & 10 (Sun), 2023

Tohoku University

Theme: Integrated-skills Learning and Assessment

Keynote Speech

An Integrated Approach to Foreign Language Instruction and Assessment

Keiko KODA
(Carnegie Mellon University)

本 Keynote Speech “An Integrated Approach to Foreign Language Instruction and Assessment”は 5 つのセクションに分けられて，説明・紹介されています。まず始めに複雑な概念としてのリーディングが説明されました。リーディングには様々なサブスキルが含まれており，例えばテキストの意味構築(text-meaning building)に関連するものでは，word recognition，言語知識，背景知識などがあり，また読み手(personal-meaning construction)に関しては過去の知識などが含まれています。テキストの意味理解には言語要素がかかわり，読み手の理解としてはテキスト情報と読み手の背景知識・過去の知識が融合して生まれます。新しい見解(insight generation)は読み手とテキストのインターラクションによって生み出されると考えられています。

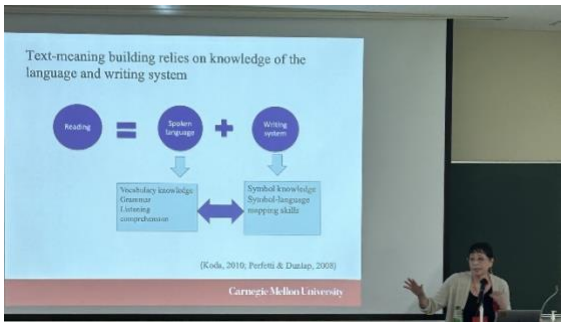
次に integrated communication (IC) skills approach に関しての説明があり，特に以下 3 つの分野での多様なサブスキルの統合が重要とされています。1 つ目は reading skills で言語

知識と decoding が含まれており，2 つ目は learning skills で情報を統合し，知識を取り入れ，内容の分析するスキルが含まれ，最後に communication skills は解釈的，個人間の，表象的なものであると考えられています。Reading and learning skills は目に見えないものなので，学習者にテキストが何を伝えているのかといった質問をすることも重要で，かつ communication skills の観点から言語使用の場を与えることも大切だと提案されました。学ぶために読む(reading to learn)ことは text-meaning building -> personal-meaning construction -> insight generation のプロセスを踏むと考えられており，personal と insight に関する質問は教科書などではあまり取り入れられていないので，テキストを読んで何を感じたか，何を学んだかといった質問をしてあげることが効果的だと言われています。

次の IC implementation の議論では，まず 3 つの目標が示されました。1 つ目は意味・目的のある言語使用を促進する，2 つ目は評価と学習を一致させることによって，リーディングを通しての学習を向上させる，personalization を通して読書と学習への積極的な関与を高める，が挙げられていました。IC instruction プログラムを日本語の授業で実施するにあたり，まずは学習目標の設定→結果に対する期待→評価・指導のデザイン→学習目標の評価→プログラムの評価というサイクルで準備を実施し，1 年次/2・3 年次/4 年次と段階的により高度な技能を指導するようにデザインされました。コミュニケーション活動やプロセスごとにどのような活動を実施することができるかも紹介されました。

最後の示唆では，このプログラムを通して，大学の外国語学習者は L1 の学習スキルを使用でき，personalized の情報を共有する際により熱心にタスクに従事し，Construct-referenced assessments が学習を導くことが判明しました。指導に関しては，形成的評価がタイムリーな scaffolding には不可欠で，意味のある言語使用によって言語学習は促進され，そのためには情報を personalized させる機会を提供する必要があると示唆されました。また，評価が学習を形作るとし，しっかりと練られた評価は，学習者が何を，どのように学ぶかを伝えてくれ，さらに学習者中心の評価は personalized information を共有することを可能にすると提案されました。

限られた時間の中，様々な興味深い内容をお話しくださり，楽しくご講演を聞くこともできましたし，たくさんのことを勉強させていただきました。ご講演の内容を personalized できるよう今後も勉強しようと思いました。最後にこのような貴重な機会を与えてくださった甲田慶子先生と学会運営委員の先生方に心より感謝いたします。



報告者　古賀　功（龍谷大学）

Symposium

Theme: Possibilities and Challenges of Integrated-skills Assessment

Coordinator:
Kahoko MATSUMOTO
(Tokai University,　Tokyo Gakugei University)

Panelists:
Kahoko MATSUMOTO
(Tokai University,　Tokyo Gakugei University)

Hiroyuki YAMANISHI
(Chuo University)
Yutaka ISHII
(Chiba University, Institute of Physical and Chemical Research)

Discussant
Keiko KODA
(Carnegie Mellon University)

本シンポジウムは「技能統合型評価の可能性」と題し，技能統合型評価の重要性と課題について共有した上で，支援や評価についての提案がなされました。

松本先生には，技能統合型評価の課題としては，受容と産出が求められるため，一定の言語能力が必要であること，結果の解釈が難しいことなどが挙げられ，今後は技能統合に特有な構成概念を特定していくことが重要とのことでした。また，JACET テスト研究会によるテストストラテジーに関する研究について共有していただいた。質的な調査では，高得点の人は全体像をとらえた上でそれをロジカルに統合する一方，低得点者はリスニングが苦手でリーディングの情報に頼り，足りない部分を想像や世界知識で補う傾向があるとのことでした。

山西先生からはルーブリックを用いた要約ライティングの指導実践についてご報告いただいた。ルーブリックの観点は，(a) 内容，(b) 言い換えの量，(c) 言い換えの質（文構造など），(d) 言語使用（語彙範囲の洗練性など），(e) 全体的な要約の質の 5 つであった。指導内容は，作成した要約をルーブリックを用いて自己評価し，その後グループによる相互評価やモデル要約の提示などをした上で修正を行うというものでした。結果として，ルーブリック，モデル要約，相互評価は学習者にとって有用だったと評価されました。自己評価，相互評価，教員の３つの評価間の相関は低く，それぞれの特性を理解した上で，異なる目的で使用することが重要であるとのことでした。

石井先生からは要約ライティングのためのウェブベースの形成的支援モジュールについてご紹介いただいた。英文の中から重要な個所を選択し，アウトラインを作成し，それらが専門家によるものと比較され，その後，要約の内容をチェックリスト（e.g.，要約ストラテジー）を使って適切かどうか判断し，最後に言い換えが不十分な個所がないかが検知されるというものでした。また，GPT-4 を使った自動フィードバックでは，チェックリストの内容が適用されているか，サマリーと一致していない箇所に関するフィードバックをするというもので，教員による評価との一致度などにおいて一定の有用性が確認されました。

指定討論者の甲田先生からは，ルーブリックを自作すること，自分の決めたルールに従って学習するなど学習者の自律をいかに育むか，成績をつけるための評価ではなく勉強の仕方を教えるための評価の重要性についてコメントをいただきました。会場とのやり取りではコピペがなぜだめなのか，自分の言葉で伝える意義を学習者にどのように伝えるかなどについて意見交換がされました。

シンポジウム全体を通して，その複雑さ故に技能統合型の評価をする際はとりわけ学習者との共通認識を構築することが重要であると感じました。要約の過程やルーブリックを具体的に示すとともにその意図や意義を共に考えることで，技能統合活動にまつわる教師と生徒が感じる難しさや不安を解消するとともに，学習プロセスへの能動的な関与を促すことにつながるでしょう。その際，自然言語処理などの技術の活用は個別最適な学びを実現するための鍵となると感じました。今後，さらなる研究や実践が蓄積されることで，技能統合型の指導と評価に対する理解が高まることを願います。最後に，このような多くの学びを提供していただいた先生方にこの場を借りて感謝を申し上げます。

報告者　鈴木　健太郎（北海道教育大学）

大会の印象

2023 年 9 月 9 日から 10 日にかけて東北大学で開催された，日本言語テスト学会第 26 回全国研究大会に参加しました。コロナ禍以降，第 21 回大会以来の対面での参加になりましたが，開催地が仙台であることを嬉しく思いました。福島県出身の私にとって仙台は常に憧れの場所で，家族と一緒に何度も行った思い出の場所だからです。その仙台に来るのも 13 年ぶりでした。肝心の学会ですが，久しぶりの対面開催の中，運営に携わってくださった先生方や学生アルバイトの皆さんのおかげで，全てがスムーズに進行されていたと思います。また，非常に多くの方が来場しており，大盛況であったと思います。参加させていただいた研究発表，基調講演，シンポジウムは全て素晴らしいもので，多くのことを勉強させていただきました。詳細は他の先生からの報告を読んでいただければと思いますが，特に甲田先生のご講演を聞くことは，大学院生のときからの念願でした。今年度の最優秀論文賞を受賞されたのは私の大学院の時の先輩である小泉先生と印南先生で，受賞のスピーチには感銘を受けました。本当におめでとうございます。素晴らしい運営によって開催された，とても思い出深い学会参加となりました。運営に携わってくださった方々，本当にありがとうございました。また次回も参加させていただきたいと思います。

報告者　今野　勝幸（龍谷大学）

Report on
JLTA Workshop
Sep. 10 (Sun), 2023

Tohoku University

Acquiring Analytical Methods for Generalized Linear Mixed Models (GLMMs) Using R: Based on Examples of Analysis in the Field of Linguistic Research

Yu TAMURA
(Kansai University)

第 26 回全国研究大会の翌日に「R を用いた一般化線形混合モデル（GLMM）の分析手法を身につける－言語研究分野の分析事例をもとに－」のタイトルでワークショップが開催された。研究大会と同様に 2019 年以来４年ぶりの対面開催であり，今回は研究大会の翌日であったにも関わらず，前日の研究大会のパネリスト等も含め，定員

25 名を超える参加人数であった。講師は関西大学の田村祐先生であり，GLMM だけでなく，ロジスティック回帰分析や R の便利な活用方法など，これまでも統計分析について様々なワークショップおよび講演をされてきた方である。

ワークショップの参加条件として「R の基本的なデータ・ハンドリングに習熟しており，統計分析の基本的な概念（とくに回帰分析）について理解していることを参加条件とします。」という条件があったため，少しハードルが高いように思われた方もいるかもしれない。正直に言えば，私も R に習熟しているとは言い難いので少し不安に思っていた。また，私のように数式がざっと出てきて面食らった人もいるかもしれないが，実際の分析データに基づいて事例を含めて具体的に説明をして頂いたので，個人的にはおおまかに概要を理解することができた。

個人的に最も印象に残ったことは，GLMM に対する幻想や過度な期待は禁物であるということだ。GLMM に対する注目は高くなっており，その背景には，現実のデータに即した適切な分析ができることや，より多くの結果を導き出せる可能性があることなどが挙げられるだろう。しかし，GLMM もあくまでも統計分析の手法の１つであり，講師も強調して説明されていたように，分析方法として GLMM をなぜ採用するのか，そして，採用したとしたらどのように行うかを含め，研究目的と手元のデータに照らしてじっくり検討する必要がある。例えば，構造方程式モデリングのように，GLMM ではデータから様々なモデルを作って，そのモデルの中から適切なものを選択するというプロセスが不可欠であるが，どのようなモデルを作るべきか，そして，それらのモデルの中でどれを選択するべきかなどは，分析者の主体的な判断が求められる。GLMM の特徴の１つとして，データの特徴を踏まえた柔軟な分析であることが言われるが，その柔軟さを担保するためには，分析結果に対して様々な可能性を考慮するという研究者の柔軟さが必要となる。その意味においては，GLMM は非常に高度な分析である一方で，とても「泥臭い」プロセスを経る必要がある。理論的背景に基づいてモデルを作っても，必ずしもそのモデルが統計学的に好ましいモデルとも限らず，その逆ということも起こりうる。個人的な経験になるが，理論的には最も妥当だと考えていたモデルが統計学的に最も適切であったということは稀である。だからこそ，分析者は，理論的背景を踏まえつつ，何度も試行錯誤をしながら分析をしていかなければならない。

講師は分析データを含めた豊富な資料を提供されており（GitHub にデータ類が掲載されている），その中にある投影資料の中では，R の基本的な操作等に関する文献や，一般化混合効果モデルに関する基礎的な文献なども紹介されている。ワークショップに参加された方もそうでない方も，GLMM による分析を行う際にはぜひ参考にされるとよいだろう。私も，ワークショップから１ヶ月後に，GLMM による分析を行う必要がでてきたため，投影資料を何度も参考にさせて頂いている。投影資料を見るたびに自分自身の不勉強を嘆く一方で，少しずつ理解が深まっていくのを感じており，GLMM の分析プロセスと同様に，少しずつでも「泥臭く」身につけていきたいと思っている。

報告者　高木修一　(福島大学)

書評
Article Reviews

Tavakoli, P., & Wright, C. (2020). *Second language speech fluency: From research to practice*. Cambridge University Press.

英語を非常に流暢に話せるようになる，ということは何とも魅力的なことではあるが，「英語を流暢に話す」と言うときの「流暢に」という表現はよくよく考えてみると，実に曖昧である。イメージでは何となく，英語を「淀みなくぺらぺらとしゃべれる」という感じになるのかもしれないが，何をもって「ぺらぺら」に話せると言えるのか。また「淀みなく」とは学問的にはどの様なことなのか，等々いろいろと疑問が湧いてくる。このように，私たちが何気なく使っている「流暢」という言葉に対して，本書はこれまでの研究で分かってきたことを基に，多くの示唆を与えてくれる。
本稿では本書の内容を全てお伝えしたいところであるが，残念ながら紙面が限られているので，先ず全体の構成を簡単に紹介した後に，第 3 章の「流暢性の測定」について詳しくお伝えする。

本書の各章は，流暢性の理論から実践と進み，心理言語学的プロセスをより詳細に検討し，運用と測定，タスク，教授法，そしてテストの応用へと進む。また本書では，言語横断的な視点から認知的相互作用的流暢性 (cognitive-interactional fluency) の再概念化 (reconceptualization)の意味を議論し，今後の研究に残された問題点を明らかにする。

第 3 章の「流暢性の測定」では，初めに，歴史的な流れの中で第二言語の流暢性の測定について述べられている。第二言語の流暢性の測定の歴史は，1980 年代まで遡る。当時の流暢性の測定は先ず第一言語や他分野を参考にした。主なものとして，第一言語の言語テストと患者の発話を判断する言語病理学であった。そして Lennon (1990)が流暢性を broad（広義）と narrow（狭義）に分けて概念化を図り，狭義において測定できることを示唆した。その後，Skehan (2003)等によって，流暢性の測定は Speed fluency（発話の流れと連続性を特徴づける測定方法），breakdown fluency（話の流れを断ち切るような間や沈黙を示す測定方法），repair fluency（逡巡，繰り返し等のモニタリングや言い直しのプロセスを反映した測定方法）の３つの測定方法によって評価されるべきであることが示唆され，多くの研究者たちがこの測定方法を研究に採用するようになった。

次に近年の流暢性の測定の発展として，３つのことを挙げている。1 つ目が，speed, breakdown, repair の観点での 3 つの測定方法が単一で測られるだけでなく，speed と breakdown，breakdown と repair 等の複数の要素が混じる複合的な測定方法ができたことである。2 つ目が発話分析の区切り方である。Lennon (1990)は T-Unit と C-Unit を用いたが，両者とも発話を分析する方法としては不十分であったため，現在では AS-Unit (Foster et al., 2000)を用いるようになった。そして 3 つ目が PRAAT (Boersma & Weenik, 2013)等のソフトウェアが開発され，より正確な分析ができるようになったことである。

その他に，本章では様々な形態での流暢性の測定について述べられている。例えば，モノローグ（一人で何かについて語ること）やダイアログ（２人以上での対話），またはコンピュータを介したやり取り等における流暢さである。

このように本書は流暢性について様々な視点から書かれた非常に有益な専門書である。流暢性に興味があるのであれば間違いなく読むべき一冊となるであろう。ただし，本書は 2020 年に出版された

ものなので，流暢性について知識を深めたいのであれば，本書のみならず，その後の研究や最近の動向についても調べる必要がある（例えば，メタ分析によるより包括的な測定基準（Suzuki et al., 2021)やAIによる流暢性の評価など）。また本稿では第３章についてしか詳細に伝えることができなかったので，もし興味のある方は本書の内容を全て読むことをお勧めする。

評者　上野正和（北九州市立高等学校教諭，筑波大学大学院生）

海外の学会・研究会参加報告
World Conference Reports

大　会：The 43rd Thailand TESOL International Conference
開催日：　2024 年 1 月 26 日～1 月 27 日
テーマ: Reconnecting ELT Professionals for Glocal Sustainability
開催地：Chaing Mai，　Thailand

今回のThai TESOL参加は思い出深いものになりました。まずはコロナが明けてからの初めての海外学会参加でしたので，期待感が高かったです。ただ，驚いたことは，コロナ前と後では航空運賃が2倍くらいになっていたことと，日本出国の1週間前くらいに私たちの発表がプログラムに載っていないことに気づいたことです。幸い発表はできましたが，プログラムに載っていませんので，来てくださった先生方が何と松本先生と石川先生ご夫妻という重鎮3名で，普段は発表中に緊張はあまりしないのですが，その時だけは手に汗握りつつ，発表を行いました。タイですので暑いくらいかと思っておりましたが，クチンは非常に過ごしやすく，また食べ物も人も素晴らしかったです。大きな学会ではないと思っておりましたが，様々なアジアの国から発表者が来て，非常に興味深い話を聞くことができました。私は欧米での学会に参加したことがないので，はっきりとは言えませんが，アジアの学会(Asia TEFL，Cam TESOL，etc)の発表は，何か親近感がわくような気がします。やはり同じEFL環境での英語教育という共通点があるのからでしょうか。現在は欧米の学会に参加することは予算的にかなり厳しいですが，アジアの学会でしたらまだ参加可能かもしれませんので，Thai TESOLは非常におすすめの学会だと思います。来年もプログラムに載せてもらえるかはわかりませんが，次もトライしようと思いました。

報告者　古賀功（龍谷大学)

JLTA 事務局より連絡
Messages from JLTA Secretariat

JLTAの活動にご理解とご協力をいただき，誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

(1) 2024 年度４月から事務局が福島県立医科大学に移転し，以下の体制となります。ご確認ください。

事務局長：久保田恵佑（福島県立医科大学)
事務局次長：前田啓貴（松山大学)
松村香奈（鶴見大学)
横内裕一郎（弘前大学)

■入会・会費納入・会員専用マイページに関する問い合わせ（前年度より変更なし)
日本言語テスト学会 会員管理センター
〒 162-0801 東 京 都 新 宿 区 山

吹 町 358-5 アカデミーセンター
TEL 03-6824-9372
FAX 03-5227-8631
Mail: jlta-post@as.bunken.co.jp

■上記以外に関する問い合わせ先
日本言語テスト学会事務局
〒960-8516 福島県福島市栄町 10-6
久保田恵佑研究室（郵送時には必ず研究室名まで書いてください）
TEL: 024-581-5533（直通）
e-mail: kkubota@fmu.ac.jp
URL: http://jlta.ac/

⑵ **2024 年度の全国研究大会**は，上智大学にて対面形式で開催させていただく予定です。開催日は10月5日（土）―6日（日）を想定し，調整を進めておりますが，変更となる可能性もございます。大会テーマ，基調講演者，並びに発表申し込みについては今後学会 HP，メール，X（Twitter）等を通じてご連絡差し上げます。大会の詳細が決まり次第，参加申込みの方法をお知らせいたします。最新情報は，以下からご確認ください。
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18
X（Twitter）：@JLTA_official

⑶ 2024 年 3 月 9 日（土）に**第 56 回 JLTA 研究例会**がオンライン形式で開催されました。
【テーマ】英語要約ライティング学習・指導用オンライン教材の開発と評価
【概要】
本研究例会では，英語要約ライティング学習・指導用オンライン教材の開発と評価に焦点を当てる。このプロジェクトでは，英語での学業従事や研究遂行上欠かせない要約の書き方の学習・指導と形成的評価のための大学英語アカデミック・ライティング授業用オンライン教材を開発し，その妥当性を検証している。今回の研究例会では開発しているシステムの概要やこれまでの実証研究の成果，また今後の実装を検討している大規模言語モデルを活用した自動フィードバックの可能性を議論する。また最後に，開発しているシステムのデモを実施すると共に実際の教室での活用例などを紹介し，アカデミック・ライティング授業における要約ライティングの指導や形成的評価のあり方についてディスカッションを行う。
【日程】
13:00-13:00 受付開始 13:30-13:35 開会・趣旨説明
13:35-14:20
Paper1 英語要約ライティング学習・指導用オンライン教材の概要と研究成果
発表者：澤木泰代（早稲田大学）・石井雄隆（千葉大学）・大井洋子（清泉女子大学）
14:20-15:05
Paper2 LLM を活用した英作文自動フィードバックの検討
発表者：徳永健伸（東京工業大学）・山田寛章（東京工業大学）
15:05-15:20 休憩
15:20-16:20 W-Writing デモ＆パネルディスカッション
パネリスト：澤木泰代（早稲田大学）・石井雄隆（千葉大学）・大井洋子（清泉女子大学）・徳永健伸（東京工業大学）・山田寛章（東京工業大学）・マキュワン麻哉（早稲田大学）・マスワナ紗矢子（東京理科大学）
16:20-16:30 閉会

当日は 40 名超が参加しました。今回の研究例会の参加報告については，次号に掲載予

定です。また，次回の研究例会については決まり次第お知らせいたします。

(4) 「**日本言語テスト学会若手研究者キャリアパス座談会・研究相談会（仮）**」の開催についてお知らせいたします。この度，公益財団法人　日本英語検定協会から，助成事業にかかる助成金を受けて本イベントを開催する運びとなりました。5月 19 日（土）に TKP 市ヶ谷カンファレンスセンターを会場に開催の予定です。登壇者など会の詳細については後日ご連絡いたします。奮ってのご参加をお待ちしております。

(5) 『**日本言語テスト学会誌**』**第 26 号**が発行され，皆さまのお手元に届いた頃かと存じます。冊子版の配送とほぼ同時期に J-STAGE https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal にて公開しています。バックナンバーを含め，ぜひご覧ください。
『**日本言語テスト学会誌**』は，狭義のテスティングに関するものだけではなく，広く評価に関する**論文を募集**しています。教育実践やプログラム評価に関するものなど，評価全般に関わる実験・知見を含みますので，どうぞ奮ってご応募ください。

日本言語テスト学会では，2019 年度より「**オンライン投稿審査システム**」を導入しました。このシステムは，2014 年度から学会業務の一部を委託してきた国際文献社が持つもので，投稿と査読の過程がオンライン上に記録されます。さらに，学会誌の一層の質の向上を目指して，既に出版された論文のデータベースを使った投稿論文の剽窃の確認や，著者による論文の匿名化の再確認もシステムの中で行います。2024 年度もこのシステムを使って投稿を受け付けます。詳細は次の通りです。

オンライン投稿審査システムに関する詳細

1. システムのウェブサイト
https://iap-jp.org/jlta/journal/login

2. 投稿期間
2024 年 4 月 7 日～2024 年 5 月 7 日

3. 学会誌執筆要領・テンプレート
最新の執筆要領やテンプレートをご参照ください。
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62

4. 問い合わせ先
日本言語テスト学会誌　編集事務局
jlta-edit@bunken.co.jp

(6) **JLTA 研修講師派遣事業**が 2017 年度から始まりました。本事業は，テスト利用・作成に関わる研修を行う機関・団体に JLTA より講師派遣を行うものです。会員の皆様におかれましては，言語テスティングにご興味のある方々へご周知くださいますようお願いいたします。
ウェブサイト：
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929

(7) 本学会ウェブサイトには，Web 公開委員会が公開を進めてくださった，**チュートリアルとワークショップ・ビデオ**があります。どうぞご活用ください。
ウェブサイト：
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=808

WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

チュートリアル（Tutorial，日本語）

・「よい」テストの条件（What is a ‘good’

test?: validity, reliability, and practicality)
・テストの構成概念 (The concept of test constructs)
・テスト細目 (Test Specification)
・リーディングテスト (Testing Reading-6 basic test formats-)
・リスニングテスト (Testing Listening)
・ライティングテスト (Testing Writing)
・スピーキングテスト (Testing Speaking)
・語彙・文法テスト (Testing Vocabulary & Grammar)
・測定の標準誤差 (Standard Errors of Measurement)
・効果量とは？ (What is the 'Effect Size'?)
・学習に役立つテスト結果の報告 (Test result reporting to enhance learning)
・古典的テスト理論 (Classical Test Theory)
・確認的因子分析 (Confirmatory Factor Analysis)
・メタ分析 (Meta-Analysis)
・質的方法 (Qualitative Methods)

ワークショップ・ビデオ（主に日本語）

2014
・Workshop 1 – CAT の基本的な考え方（スライド）
・Workshop 2 – J-CAT（スライド 1,スライド 2,スライド 3）

2015
・Workshop 1 – テストデータ分析入門（in English）
・Workshop 2-1 – 生徒の力を伸ばす定期テストの作り方―妥当性と信頼性に留意して（スライド）・Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency（スライド）

2016
・Workshop 1-1 初めて学ぶ効果量－入門編（スライド）
・Workshop 1-2 初めて学ぶ効果量－理論編（スライド）
・Workshop 1-3 初めて学ぶ効果量－実践編（スライド）

2017
・Workshop – テキストマイニングを使った自由記述式アンケートの分析

2019
・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用（前半）
・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用（後半）
・配布資料

2021
・JLTA 2021 Workshop – 自律的学習者を育成する中学校外国語科授業の実際（前半）
・JLTA 2021 Workshop – 自律的学習者を育成する中学校外国語科授業の実際（後半）
・配布資料

2023
・JLTA 2023 Workshop – R を用いた一般化線形混合モデル (GLMM)の分析手法を身につける－言語研究分野の

分析事例をもとに－（前半）
・JLTA 2023 Workshop － R を用いた一般化線形混合モデル（GLMM)の分析手法を身につける－言語研究分野の分析事例をもとに－（後半）

(8) **JLTA 最優秀論文賞**

2023 年度の最優秀論文賞は以下の通りに決定しました。

著者：

Kazuyo Kawamura, Osamu Takeuchi (敬称略)

タイトル：

Assessing the Interactional Competence in English Speaking of Japanese Junior High School Students in an Interview Test

該当ページ：

JLTA Journal, 26, pp. 3–22.

おめでとうございます。受賞者からのコメントは次号の JLTA Newsletter にてお届けする予定です。

(9) **JLTA 著作賞の推薦について**

JLTA では 2020 年度より「**JLTA 著作賞**」の表彰を行っています。推薦図書がある場合は，以下のページにある規程・テンプレートをご確認・ご記入の上，著作賞選考委員長へ送付ください。送付先につきましても，以下リンクをご参照ください。

http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618

(10) **その他確認のお願い**

● 会員情報や会費納入状況の確認・修正ができる「マイページ」はご利用いただいていますでしょうか。ログインに必要な会員番号やパスワードを紛失された方は以下からお問い合わせください。

https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact

● 所属や書類発送先のご住所など登録情報に変更がある場合，上記マイページにて登録情報の変更をお願いいたします。

特に，メールアドレス，住所の変更がある場合，確実に変更手続きをしていただくようお願いいたします。

● 学生会員の方は，毎年学生証のコピーを会員状況確認のためご提出お願いいたします。

● 2022・2023 年度の会費振込について，これからの方は早急によろしくお願いいたします。2022 年度分のお支払いがない場合には，2024 年 4 月より送付物の発送や電子メールの配信がなくなり，マイページの使用もできなくなります。

● 本会の退会を希望される方は，事務局（jlta-post@as.bunken.co.jp）へご連絡をお願いいたします。

文責：

JLTA 事務局長　横内裕一郎（弘前大学）

JLTA 事務局次長　藤田亮子（順天堂大学）
久保田恵佑（福島県立医科大学）
前田啓貴（松山大学）

日本言語テスト学会（JLTA）公式
X (Twitter)アカウント: @JLTA_official
https://twitter.com/JLTA_official

Messages from the Secretariat

We are thankful for your support and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you have. Also, please see our English website for more details:

http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=599

(1) From April 2024, the **Secretariat will move to Fukushima Medical University**, and the following individuals will take care of the work.

Secretary General: Keisuke KUBOTA (Fukushima Medical University)

Vice Secretary General: Hiroki MAEDA (Matsuyama University)

Vice Secretary General: Kana MATSUMURA (Tsurumi University)

Vice Secretary General: Yuichiro YOKOUCHI (Hirosaki University)

Contact information:
(a) JLTA administration office
Address : Academy Center, 358-5 Yamabuki-cho, Shinjuku, Tokyo 162-0801 Japan
TEL: +81-3-6824-9372
FAX: +81-3-5227-8631 from outside Japan
E-mail : jlta-post@as.bunken.co.jp

(b)
The Secretariat, Japan Language Testing Association (JLTA)
Keisuke Kubota (Fukushima Medical University)
Address: Fukushima Medical University, 10-6, Sakae-machi, Fukushima, Fukushima, 960-8516, Japan
TEL: +81-024-581-5533 (main switch number)
e-mail: kkubota@fmu.ac.jp
URL: http://jlta.ac/

(2) **The 27th JLTA Annual Conference** is scheduled to be held October 5 (Sat)–6 (Sun) at Sophia University. The conference's theme, keynote speakers, and presentation registration will be announced via the JLTA website, e-mail, and Twitter. The latest information can be found at http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18 or on the official X account (@JLTA_official).

(3) **The 56th JLTA meeting** was held online on Saturday, March 9, 2024. Over 40 participants attended the meeting. A report on the participation in this meeting will be published in the next issue. The next meeting will be announced as soon as it is decided.

(4) We are pleased to announce **a JLTA career seminar for young researchers**, supported by a grant from the Eiken Foundation of Japan. This event is scheduled at the TKP Ichigaya Conference Center on Saturday, May 19, 2024. We will inform you about the details once they are decided.

(5) **The *JLTA Journal* (vol. 26)** was

published and sent to members' registered postal addresses. Previous volumes were uploaded onto J-STAGE (https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal). The latest volume (vol. 26) was added.

The *JLTA Journal* invites various types of contributions that include studies related to evaluation in a broader sense, such as classroom-based practice and program assessment that deal with issues and topics on testing and assessment.

We introduced an "**Online Submission and Review System**" from the academic year 2019. This system is organized by the International Academic Publishing Co., Ltd., which JLTA has commissioned part of JLTA's administrative work since 2014. Within this system, all submission and review processes will be recorded online. Furthermore, to improve the JLTA Journal's quality, submitted manuscripts will be checked for plagiarism using a database of published articles and for anonymity using human resources.

Details about JLTA Online Submission and Review System

1. Website
https://iap-jp.org/jlta/journal/login

2. Submission period in 2024
We only accepted submissions during the following period:
April 7, 2024 to May 7, 2024

3. The Guidelines for Contributors and Templates
Please see and follow the latest guidelines and templates before submission, which are located at:
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62 for details.

4. Contact information of the JLTA editing office: jlta-edit@bunken.co.jp

(6) We have been working on the **JLTA Training Lecturer Dispatch project** since 2017, which aims to send a lecturer from JLTA to institutions and organizations wanting to hold a training session or meeting on test development and use. Please feel free to convey this information to those who may be interested.
Website:
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929

(7) Our website has various useful content for the public. It is our Web Publication Committee that is responsible for the creation and organization of content. Since some of the content posted is in English, we hope you use them to the fullest.
Website:
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_i

d=808

WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

Tutorial (in Japanese)

- What is a 'good' test?: validity, reliability, and practicality
- The concept of test constructs
- Test Specification
- Testing Reading-6 basic test formats
- Testing Listening
- Testing Writing
- Testing Speaking
- Testing Vocabulary & Grammar
- Standard Errors of Measurement
- What is the 'Effect Size'?
- Test result reporting to enhance learning
- Classical Test Theory
- Confirmatory Factor Analysis
- Meta-Analysis
- Qualitative Methods

Workshop Videos

2014 (in Japanese)

- Workshop 1 – Basic Concepts of CAT
- Workshop 2 – J-CAT

2015

- Workshop 1 – Introduction to Test Data Analysis (in English)
- Workshop 2-1 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (in Japanese)
- Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (in Japanese)

2016 (in Japanese)

- Workshop 1-1 Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Beginning Guide)
- Workshop 1-2 Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Theoretical Guide)
- Workshop 1-3 Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Practical Guide)

2017 (in Japanese)

- Workshop – An Analysis of Free Descriptive Questionnaire by Text Mining

2019 (in Japanese)

- Workshop – Bayesian Statistics and its Application to Foreign Language Education Study
- Handouts

2021 (in Japanese)

- JLTA 2021 Workshop – Practice of Junior High School Foreign Language (English) Classes for Developing Autonomous Learners
- Handouts

2023 (in Japanese)

- JLTA 2023 Workshop – Acquiring Analytical Methods for Generalized Linear Mixed Models (GLMMs) Using R: Based on Examples of Analysis in the Field of Linguistic Research

(8) JLTA determines a winner for **the JLTA Best Paper award** chosen from papers published in the latest issue of the *JLTA Journal*. The award is conferred at the annual conference in the following year. We are pleased to announce the award recipients for the 2023 JLTA Best Paper Award.

Authors:

Kazuyo Kawamura, Osamu Takeuchi

Title:

Assessing the Interactional Competence in English Speaking of Japanese Junior High School Students in an Interview Test

Locations:

JLTA Journal, 26, pp. 3–22.

(9) Recommendation for the JLTA Book Award

JLTA commenced the "**JLTA Book Award**" event in 2020. If there is a book you want to recommend for the award, please check and fill out the rules and templates on the following page and send them to the Chair of the Book Award Selection Committee. Please refer to the link given below for shipping addresses.

http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618

(10) Request for Confirmation

● Have you visited the "My Page" site, where you can check and modify your membership information and check your yearly membership fee payment status? Please contact us if you need your membership number and password, which are necessary details for the login.

https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact

● If you have changes in your affiliation, address, and other information, please update your registered information on "My Page" by the end of March. **In particular, if you have changed your e-mail address or mailing address, please be sure to make the necessary changes.**

● We annually send student members a message asking them to submit a copy of a student certificate.

● If you have not yet paid the yearly membership fee for 2022 and 2023, please do so at your earliest convenience. If you do not pay the fee for 2022, you will receive no shipment or email message from JLTA and will not be able to use the "My Page" site after April 2024.

● If you plan to leave JLTA, please let us know by sending a message to jlta-post@as.bunken.co.jp

JLTA Secretary General
Yuichiro YOKOUCHI
(Hirosaki University)
JLTA Vice Secretary General
Ryoko FUJITA (Juntendo University)
Keisuke KUBOTA (Fukushima Medical University)
Hiroki MAEDA (Matsuyama University)

JLTA Official X (Twitter) account:
@JLTA_official
https://twitter.com/JLTA_official

日本言語テスト学会事務局
〒036-8560 青森県弘前市文京町 1
弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター
横内裕一郎研究室（郵送時には必ず研究室名を明記してください）
TEL: 0172-36-2111（代表）
e-mail: u16yoko@gmail.com
URL: http://jlta.ac

編集：　広報委員会
委員長　古賀功（龍谷大学）
副委員長　土平泰子（聖徳大学）

委員
笠原究　（北海道教育大学旭川校）
長沼君主（東海大学）
宮崎啓　（東海大学）